

活動報告書

報告者氏名：鶴田 恵市

所属：信州大学附属特別支援学校

記録日：H27年2月27日

【対象児の情報】

○学年

特別支援学校小学部2年生の男児

○障害名

知的障がい

○障害と困難の内容

発音が不明瞭であるが、挨拶（「おはようございます」「ありがとう」）を伝えるときや教師を呼びかけるとき（「せんせい」）は、ゆっくりと口を開いて発話をする。また、嬉しいことや困ったこと、自分が体験したことを教師に伝えたいという気持ちが強く、伝えたいことがあるときは、「あ、あ」と声を出しながらジェスチャーや指さしで相手に自分の伝えたいことを伝える。

一方で、自分が伝えたいことを相手にじゅうぶんに伝えることが難しく、なんとなく伝わったところで諦めてしまったり、相手から具体的に質問してくれることを待つ受け身のなかかわり方が多くなりがちになってしまったりしている。

【活動目的】

○当初のねらい

伝えたい思いを強くもっているが、言葉で伝えることが難しいためにじゅうぶんに自分の思いを伝えきれない対象児に、自分が伝えたいことが伝わる満足感、さらにいろいろな事を伝えようとする意欲の高まりを願い、「伝える手段の広がり、伝える意欲の高まり」をテーマにして、以下の2点から自分の伝えたいことを広げる取り組みを行う。

- ① iPadを使って、自分の要求や思いを教師に伝える。
- ② iPadを使って、学校での様子をお家の方に伝えたり、家庭での様子を教師に伝えたりする。

○実施期間

平成24年4月～平成25年2月

○実施者

鶴田 恵市

○実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ① 給食で食べきれないときに、下を向いたまま黙ってしまう。教師が、「減らしますか」と尋ねると、頷く。また、休み時間でやりたいことがあるときに、指さしをしたり実物をもってきたりして教師にやっていいかを聞いてくる。教師が、「〇〇するのですか?」と尋ねると、頷いたり首を振ったりして確認をする。

→教師からの働き掛けや教師の判断で活動をするが多くなりがちである。自己で選択したことを伝える機会が必要である。**自己選択・意思表示**

- ② 休み時間に自分で書いたイラストを家に持ち帰り保護者に見せたり、家庭で保護者と文字の練習をしたノートを学校に持ってきて教師に見せたりする。

→自分が取り組んだ事を人に見せたいという意欲が高い。継続的に自分の取り組みを色々な人に伝えて、評価を受ける機会を設定することが、活動への意欲を高めることに有効である。**意欲的な活動**

○活動の具体的内容

- ① 自己選択、意思表示について

【5月からの取り組み】

- ・「DropTalk HD」を使い、給食の場面で、減らすか増やすかをイラストで選択し、教師に伝える。
- ・「DropTalk HD」を使い、家庭の食事場面で、減らすか増やすかをイラストで選択し、保護者に伝える。

【7月からの取り組み】

- ・「DropTalk HD」に対象児が好んで取り組む遊びや遊び場のイラストを入れておく。教師に伝えてから遊ぶ必要がある遊びについては、イラストで選択し、教師に伝えてその遊びを行う。

- ② 意欲的な活動について

【5月からの取り組み】

- ・ iPad で撮影した写真を自分で選んで自分で印刷をし、壁新聞を作成する活動を行った。
- ・ 教師が活動中に iPhone で撮影した写真の中から、「無線写真転送」のアプリを利用して、好きな写真を自分で選び、対象児の利用する iPad に写真を転送できるようにした。

【9月からの取り組み】

- ・ iPad を家庭に持ち帰り、壁新聞づくりのときに撮影した写真を保護者と一緒に見られるようにした。
- ・ 活動している様子を動画で撮影し、家庭で学校での活動の様子をより詳しく見せられるようにした。

【11月からの取り組み】

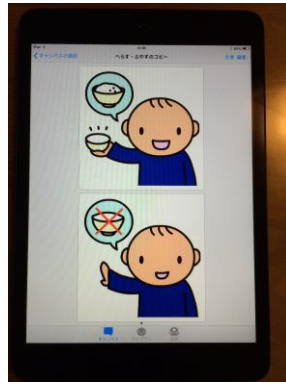
- ・ 壁新聞や写真館を一人で校内に掲示したり、他の教室にお届けに行ったりするときに、facetime を使いその場の様子や困ったことを伝えられるようにした。
- ・ 帰宅後に教師に伝えたいことがあると facetime で伝えるようになった。いつでも対応できるように、メッセージで写真を送ることができるようにした。

○対象児の事後の変化

① 自己選択、意思表示について

【給食の場面】

- ・ 取り組みの当初「DropTalk HD」を使い、給食の場面で、減らすか増やすかをイラストで提示すると、何回も両方のボタンを押して楽しんでた。ボタンを押して音声が出て楽しむ遊びに飽きてきた頃から「自己選択」をする活動を取り入れた。



これまで給食の場面で、事前に減らしたり、増やしたりする機会がなかったために、まずは、給食を食べる前に減らしたり、増やしたりすること自体の学習を行った。iPadを使って給食の量を調整するやり方を確認するために、「いただきます」をした直後に、1品ずつ「このままでよいか」「ふやすか」「へらすか」を確認した。「減らしてください」「増やしてください」の言葉の使い分けが難しかったようで、減らしてほしいのに「増やしてください」のボタンを押していた。教師は、ボタンの通りにおかずを増やすと、慌てて首を振り「減らしてください」のボタンを押し直していた。取り組みから2週間程で言葉の意味を理解し、使い分けができるようになってきた。多くは、「このままでよい」という判断で、ボタンを押さないでいた。対象児が、本当に増やしたいときや減らしたいときに、iPadを使って提示することが大切と考え、教師から確認することを徐々に減らしていった。教師からの確認をなくしていくと、対象児は、食べている途中や食べ終わる頃に「減らしてください」のボタンを押すことが増えてきた。

10月頃までは、給食のテーブルには必ず自分でiPadを置いて食べていたが、ある日からiPadを出さなくなった。出さなくなると最初は、使いたいときには、ロッカーにiPadを取りに行ったり、私にiPadを出してほしいことを伝えてきたりした。12月頃からは、減らしたときは、「いい」と言って手を前に出し、増やしたいときは、「おねがいします」と器を持って前に出した。

- ・ 夏休みから、家庭でも「DropTalk HD」で「増やしてください」「減らしてください」の意思表示を行うようにしていただいた。食事の後半に、「減らしてください」のボタンを押すことに多く利用していた。

【休み時間の様子】

- ・ 取り組みの前、休み時間になると教師のそばに来て一緒に遊びたい気持ちを伝えていたが、何をして遊ぶかは教師からの働き掛けを受けて、「うん」と答えて一緒に遊ぶ姿が多く見られていた。その時期に学級でよくやっていた遊び「粘土」「塗り絵」「音楽を聴く」などのイラストを「DropTalk HD」に入れて提示すると、自分がやりたいことがあるとその中からボタンを押して教師に伝えてきた。また、遊びに行ける場所も「中庭」「他の教室」「ベランダ」など数種類の写真を選択できるようにした。取り組み当初は、iPadを持ってきてボタンを押すと聞こえる音声に合わせて、「〇〇」と発話して教師に「何をしたいか」「どこで遊びたいか」を伝えていた。当初は、頻繁に使用して教師に伝えていたが、次第に使用しなくなってきた。実物を提示したり、ジェスチャーをしたりする方が早く伝わり、iPadを使う必要感がないと感じたようである。

それ以降は、実物やジェスチャーで伝わりにくいことのみをiPadのイラストとして提示するように変更していった。

【使用したアプリ】



「DropTalk HD」

② 意欲的な活動について

【新聞作りの活動】

- ・5月当初にiPadが自由に使えるようになると、ゲーム以外の機能として、「カメラ」の機能を楽しんで使用し始めた。初めの頃は、教室内を闇雲に撮影して楽しんでた。撮った写真を教師に見せることもなく、撮影する行為自体を楽しんでいるようであった。しばらくすると人物を撮影するようになってきた。人物を撮影すると、すぐにその人に撮影した写真を見せて楽しんでた。撮影してもらった教師や友達はその写真を見て喜ぶので、対象児の、「撮影した写真を見せたい」という思いが次第に強くなっていったと思われる。そこで、個別学習として、撮影した写真を印刷していろいろな人に紹介する新聞づくりに取り組んだ。いずれは対象児が撮影した写真を使うことを目標に、まずは教師が撮影した写真を使うことにした。
- ・活動の始めは、教師が対象児の活動の様子をiPhoneで撮影した写真の中から、好きな写真を自分で選び、「無線写真転送」のアプリを利用して、対象児の利用するiPadに写真を転送できるようにした。「Epson iPrint」のアプリを使い、自分で写真を選んでから印刷して新聞作りを行った。できた新聞は、廊下に掲示したり、自分の家に持ち帰ったりしていた。校内では、新聞のことでいろいろな先生に呼び掛けられることが多くなり、掲示する前に完成した新聞を直接見せて回るようになってきた。また、お家に作った新聞をもって行くことにより、お家で新聞の写真を話題にしていろいろと話をすることが楽しみになったようである。
- ・しばらくすると、自分で写真を撮りたいことを伝えてきたので、活動中にiPadを持って校内を回って気に入った写真を教師と一緒に撮影するようにした。「カメラ」で撮影すると、すぐに自分で確認をしてから、教師にも見せて教師からの反応を楽しみにしていた。
- ・個別学習の時間での撮影を繰り返すと、学校生活の中で、「今、写真を撮りたい」ということを教師に伝えるようになってきた。iPadを教師から手渡されると、喜んで撮影をした。また、教室を出て活動するときには、教室を出る前にiPadを持って行くことを教師に伝えるようになってきた。
- ・二学期になり、再び自分で撮影したものだけでなく、教師が撮影した写真からも記事に使う写真を選びたがるようになった。対象児が活動している様子の写真を使いたかったようであった。そこで、「無線写真転送」のアプリを利用して、教師がiPhoneで撮影した写真から、好きな写真を選び、対象児の利用するiPadに写真を転送できるようにした。
- ・完成した新聞は、掲示場所を自分で増やし校内のいろいろな場所に掲示したり、先生たちに自分から配ったりするようになった。また、家庭にも二部持ち帰り、知っている方に渡すなど、新聞を通してやり取り



することが楽しみになり、対象児の「いろいろな人に見せたい」という思いは大きく広がってきた。

【使用したアプリ】



「無線写真転送」



「Epson iPrint」



「カメラ」



「写真」

【写真や動画で伝えたいことを伝える】

- ・帰宅すると iPad に入っている新聞作りのために撮影した写真をお家の方に紹介するようになってきた。そこで、「無線写真転送」のアプリを使って教師がその日に iPhone で撮影した写真から自分で選択して、対象児の iPad にデータを移動できるようにした。家庭に帰ってから、写真を見せることにより、お家の方も質問が具体的にでき、家庭でのやり取りが増えた。
- ・学校の活動中にお家の方に伝えたいことや物（図工の作品が完成したとき、給食を残さず全て食べたとき、転んでけがをしてしまったときなど）があると、活動中に自分の様子を写真で撮って欲しいことを伝えてくるようになってきた。
- ・また、家庭で取り組んだ学習の様子や兄弟と遊んでいる様子などの写真を撮影してきて、学校で教師や友達に嬉しそうに紹介する姿が増えてきた。
- ・家庭で遊んでいる様子や学習している様子を動画で撮影して学校に来る日があった。登校後にすぐに、iPad を出して教師にその動画を見せた。教師だけでなく、友達も含めてみんなで動画を見て楽しんだ。翌日には、学校での当番活動の様子を動画で撮影して家庭に持ち帰った。家族みんなでその様子を見て、学校での様子について話題が広がった。これまで自分の伝えたいことを身振りや写真で伝えてきたが、その手段に動画が加わったことにより、家庭で対象児のことが話題に挙がるのが一段と増え、本人も満足感を得ているようである。一日の生活の中で、何かあると自分から iPad を持ち出し、撮影してほしいことを伝えてくる。

【使用したアプリ】



「カメラ」



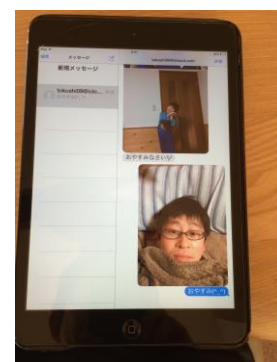
「無線写真転送」



「写真」

【iPad で離れた人に伝える】

- ・壁新聞や写真館を一人で校内に掲示したり、他の教室にお届けに行ったりするときに、「カメラ」を使って、その場の様子を撮影して教師に伝えるようになってきた。教師がその都度、その写真を話題に取り上げて喜んだり、驚いたりしていると、教師に報告するという目的で iPad を利用する姿が見られ始めた。
- ・さらにやり取りの幅が広がるように、「facetime」の利用を始めることにした。対象児が帰宅する際に車に乗った頃を見計らって「facetime」を使い、さよならの挨拶



をすると、帰りの際の「facetime」を使ったやり取りを楽しみにするようになってきた。玄関を出ると、電話のジェスチャーをして連絡をしてほしいことを伝えてから車に向かうようになった。「facetime」の使い方が分かってくると、帰宅後に教師に伝えたいことがあると「facetime」で伝えるようになった。

- ・「facetime」は、いつでも対応できるわけではないので、「メッセージ」のアプリを使いメッセージで写真を送ることができるようにした。こちらの方が対象児にとっては気軽に扱えるアプリであり、見ているテレビやおもちゃを撮影して送ってきたり、カラオケをしている様子をお家の方に撮影してもらって教師に送ってきたりするようになった。

【使用したアプリ】



「カメラ」

「メッセージ」「facetime」

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づきとエビデンス

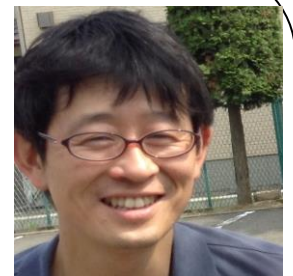
- ① 写真や動画使うことにより、いろいろな人とやり取りをする機会が増え、伝えたいと願う中身が広がった。取り組みの当初は、「自分が撮影した写真を見てほしい」という願いだったものが、次第に「自分が活動している様子を見てほしい」、「自分が活動しているときの気持ちを伝えたい」という願いに変わってきた。

〈導入当初のやり取り〉

対象児は、ジェスチャーのみで伝えてくるため、教師が確認のために「～なの？」と尋ねることが多かった。それに対して対象児は、「うん」と答えることが多かった。また、質問されたことがよく分からなくても「うん」と答えることが多くあった。



- ① カラオケのジェスチャーをしてくる
- ② 「カラオケやったの？」
- ③ 「うん」
- ④ 「何を歌ったの？」
- ⑤ ジェスチャーで妖怪体操をする。
- ⑥ 「妖怪体操？」
- ⑦ 「うん」
- ⑧ 「だれとやったの？」
- ⑨ 「パパ」
- ⑩ 「楽しかった？」
- ⑪ 「うん」

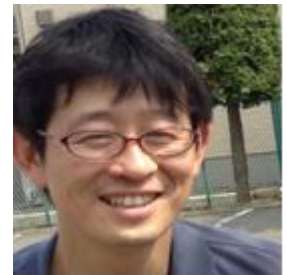


〈現在のやり取り〉

対象児は、i P a dの画像や動画を見せるために、伝えたいことが明確になった。相手を見ながら写真を指さしたり、ジェスチャーをしたりして伝える。相手の質問に対して写真を指さす。これを繰り返すことにより、相手も具体的に質問をすることができ、やり取りがさらに広がった。また、家庭でも同様のやり取りが増えた。



- ① 「せんせい」と言って
i P a dを見せる。
- ② 「公園に行ったんだね」
- ③ 写真の自転車指さす。
- ④ 「自転車で行ったの？」
- ⑤ 「うん」と答えてすべり台
を指さす。
- ⑥ 「すべり台もやったんだね」
- ⑦ 次の写真を出す。
- ⑧ 「野球もやったんだね」
- ⑨ 学校の中庭を指さし、
バットを振るまねをする。
- ⑩ 学校でもやろうね。
- ⑪ 「うん」



給食の場面で、「DropTalk HD」を利用して、相手に自分の意思を伝えたり、新聞作りを通して写真を相手に見せてやり取りをしたりすることを通して、i P a dの「カメラ」で撮影した写真を使って、自分が伝えたいことを伝える手段が増えた。また、対象児が伝えたいことがあるときには、自分からi P a dで撮影をしたり、撮影した写真を見せたりすることからi P a dを使ってやり取りするよさを実感していると考えられる。

- ② 相手とのやり取りを楽しむ段階を得て、嬉しかったことを伝える、困ったことを伝える、自分が取り組んだことがよいかどうかを確認する伝達手段としてi P a dの利用法が広がった。

《導入当初の利用例》

- ・朝の時間：着替えのときにタイマーとして使う。
- ・休み時間：教室にあるものを撮影して見せる。ゲームなどの余暇活動。
- ・個別学習：写真館づくりの写真撮影。
- ・給食の時間：「お代わり」などの意思表示をして使う。
- ・係活動：写真を並べ、手順表として使う。

導入当初は、i P a dの利用は、学校生活をすごすうえで、教師が用意して手順表やタイマー、お代わりのとして利用するといった教師が設定した場面での利用が多かったり、「カメラ」で撮影したり、ゲームをしたりするといった対象児が楽しむための利用が多かったりした。

《現在の利用例》

- ・〈朝の時間の活用の具体例〉

家庭で楽しいことや嬉しいことがあると、そのことを自分で撮影したり、母に撮影をお願いしたりしている。家庭で何か撮影してきたときには、登校



すると玄関で iPad を指さし、ジェスチャーであったことを伝えてくる。教師が、「教室に行ったら一緒に見ようね」と声を掛けると、「うん」と答えて嬉しそうに教室に向かう。教室で iPad を取り出して写真を見せながら、ジェスチャーや言葉を交えながらそのときの様子を伝える。私とのやり取りが終わると、他の教員にも写真を見せに行く。

・〈個別学習での活用の具体例〉

完成した写真フレームを一人で飾りに行ったが、裏返しになってしまった。私の所に来て、「あ、あ」と飾った教室の方向に指をさしながら何か伝えているのだが、私が見えず、「どうしたの？」と何回か聞き返すと、iPad を持ち写真を撮ってきた。「あ～裏返しになったんだね」と尋ねると、「うん」と笑顔で答えて、他の先生にも iPad の写真を見せた。その日以来、写真フレームを飾りに行くときには、iPad をもって行き、上手く飾れないと、その場面を写真に撮って見せるようになった。



・〈学級の時間での活用の具体例〉

図工で制作した作品が完成すると、自分で iPad を持ってきて撮影をする。教師が、「どうするの」と尋ねると、「ママ」と答えて、撮影した写真を教師に見せた。「お母さんに見せるんだね」と尋ねると、「うん」と笑顔で答える。

・〈放課後での活用の具体例〉

家庭から、「facetime」を使ってそのときにやっていることを伝えてきたり、「メッセージ」を使って、写真を送ってきたりする。

iPad を利用するとき、「相手に何かを伝えたい」という目的があり、そのための手段として利用することが多くなった。これまでのようにジェスチャーや片言の言葉に合わせて、iPad を使うことにより、相手に自分の意思を伝えやすくなることを実感していると考えられる。

③ その他のエピソード

家庭で遊びとして「YouTube」を見て、大好きなダンスを見ていることが多かった。家庭では次第に、兄弟と一緒に踊ったり、学校でも教師や友達に見せて一緒に踊ったりするなど、「ひと」とのかかわりが広がる手段の一つにもなっている。

今後も、「伝えたい」「一緒にやりたい」といった対象児の気持ちが広がるような利用場面を考えていきたい。